

ANAグループ連結財務諸表

2010年4月1日～2010年12月31日

連結貸借対照表

(単位 億円)

	前期末 2010年 3月31日現在	当第3四半期末 2010年 12月31日現在		前期末 2010年 3月31日現在	当第3四半期末 2010年 12月31日現在
A 資産の部			B 負債の部		
流動資産	4,215	5,642	流動負債	4,726	5,427
固定資産	14,367	14,604	固定負債	9,063	9,697
繰延資産	8	6	(有利子負債)	(9,416)	(10,150)
			負債合計	13,789	15,125
			C 純資産の部		
			株主資本	4,855	5,308
			評価・換算差額等	△ 119	△ 246
			少数株主持分	65	65
			純資産合計	4,800	5,127
資産合計	18,590	20,253	負債純資産合計	18,590	20,253

A 資産の部

流動資産は譲渡性預金などの手元資金が増加して前期末より1,427億円、固定資産は航空機関連の投資等により同236億円それぞれ増加したことなどから、資産は同1,662億円増加しました。

B 負債の部

社債の発行や新規借入により有利子負債が前期末より733億円増加したことなどから、負債は同1,335億円増加しました。

C 純資産の部

利益剰余金の増加(446億円)や繰延ヘッジ損失の増加(112億円)などの結果、純資産は前期末より326億円増加しました。少数株主持分を差し引いた自己資本も同額増加し5,062億円となり、自己資本比率は25.0%になりました。

D 特別損益

独禁法関連引当金戻入益167億円を特別利益に計上しました。一方、第2四半期に引き当てた和解金68億円や投資有価証券評価損35億円を特別損失に計上しました。

キャッシュ・フロー

- 営業活動によるキャッシュ・フローは、営業収入の大幅な増加により1,824億円の収入となりました。
- 投資活動によるキャッシュ・フローは、航空機を中心とした投資を行い1,737億円の支出となりました。この結果、フリー・キャッシュ・フローは87億円の収入になりました。
- 財務活動によるキャッシュ・フローは、借入金の返済を進める一方、社債の発行や新規借入による資金調達を行った結果、665億円の収入となりました。
- 以上の結果、現金及び現金同等物の四半期末残高は2,231億円となりました。

※金額、数量は表示単位未満の端数を切り捨てています。
※決算に関する資料は当社ホームページでもご覧になれます。

ANA 検索 → IR情報 → 決算・IR情報 → 決算短信

連結損益計算書

(単位 億円)

	前第3四半期 2009年 4月 1 日から 2009年12月31日まで	当第3四半期 2010年 4月 1 日から 2010年12月31日まで
営業収入	9,237	10,391
営業費用	9,615	9,614
営業利益又は損失(△)	△ 378	777
営業外収益	86	61
営業外費用	284	255
経常利益又は損失(△)	△ 576	583
D 特別利益	21	168
D 特別損失	25	142
税金等調整前四半期純利益又は純損失(△)	△ 580	609
法人税等	△ 226	232
少数株主利益又は損失(△)	△ 1	1
四半期純利益又は純損失(△)	△ 351	375

セグメント別の営業収入

(単位 億円)

	前第3四半期 2009年 4月 1 日から 2009年12月31日まで	当第3四半期 2010年 4月 1 日から 2010年12月31日まで
航空運送事業	8,163	9,307
旅行事業	1,269	1,248
その他	1,033	1,044
営業収入	10,466	11,600
セグメント間調整額	△ 1,228	△ 1,209
連結営業収入合計	9,237	10,391

連結キャッシュ・フロー計算書

(単位 億円)

	前第3四半期 2009年 4月 1 日から 2009年12月31日まで	当第3四半期 2010年 4月 1 日から 2010年12月31日まで
営業活動によるキャッシュ・フロー	830	1,824
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 3,040	△ 1,737
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,823	665
現金及び現金同等物の四半期末残高	1,046	2,231

セグメント情報

航空運送事業

● 国内線旅客

10月からは羽田空港D滑走路供用開始に伴い、徳島線の運航開始や一部路線の増便を実施しました。ビジネス需要、プレジャー需要とともに堅調に推移する中、「乗継特割」の新規路線設定、羽田第2ターミナル拡張等、需要喚起とサービス強化に努めた結果、旅客数は前年同期比104.5%、収入は同104.7%に増加しました。

● 国際線旅客

羽田空港から国際定期便9路線が就航し、首都圏発に加えて地方発の需要喚起効果もあり、ビジネス需要、プレジャー需要とも顕著な回復を見せました。尖閣諸島問題の影響で中国路線の観光需要が落ち込みましたが、旅客数は前年同期比114.5%に増加しました。さらに単価の改善も寄与して収入は同137.3%に増加しました。

● 貨物

国内貨物は、上半期における機材の小型化の影響などにより、輸送重量は前年同期を下回ったものの、単価の改善により収入は前年同期比100.8%と前年同期並の実績を確保しました。国際貨物は液晶・半導体関連部材の荷動きが活発なアジア域内路線、自動車部品を中心とした日本発北米路線の需要が好調で、輸送重量は前年同期比140.1%に、収入は同166.7%にそれぞれ増加しました。

● その他

旅客の搭乗受付や手荷物搭載などの地上支援業務の受託が増え、収入は前年同期比106.7%に増加しました。

旅行事業

海外旅行では羽田発チャーター便の強化や羽田発定期便のツアーが好調で、尖閣諸島問題や韓国への砲撃事件の影響が一部に見られたものの、売上高は前年同期を上回りました。一方、国内旅行では上半期の北海道、沖縄、九州などの主要方面は低迷しましたが、売上高は前年同期と同水準となりました。旅行事業全体の収入は前年同期比98.4%でしたが、コスト削減に努めた結果、営業利益は32億円(前年同期は営業損失2億円)と黒字になりました。

その他

空港店舗を中心とした顧客サービス事業分野や航空機事業、機械事業など商事・物販事業に回復が見られたことなどから、収入は前年同期比101.1%となり、営業利益は40億円(前年同期比183.0%)に増加しました。

航空運送事業収入

(単位 億円)

(単位 億円)		前第3四半期 2009年 4月 1 日から 2009年12月31日まで	当第3四半期 2010年 4月 1 日から 2010年12月31日まで	増減	
航空運送事業	国内線	旅 客 収 入	4,805	5,030	224
		貨物・郵便収入	270	271	0
		小 計	5,076	5,301	225
	国際線	旅 客 収 入	1,565	2,150	584
		貨物・郵便収入	415	674	258
		小 計	1,980	2,824	843
	航空事業収入合計		7,056	8,126	1,069
	そ の 他 の 収 入		1,106	1,180	74
	合 計		8,163	9,307	1,143

(注)各収入はセグメント間の売上高を含んでおります。

輸 送 実 績

		前第3四半期 2009年 4月 1 日から 2009年12月31日まで	当第3四半期 2010年 4月 1 日から 2010年12月31日まで	前年同期比 (%) 利用率はポイント
国内線	旅客数 (万人)	3,019	3,155	104.5
	座席キロ※1 (億席キロ)	435	427	98.2
	旅客キロ※2 (億人キロ)	267	279	104.4
	利用率※3 (%)	61.4	65.3	+3.9
	有効貨物トンキロ※5 (百万トンキロ)	1,447	1,406	97.2
	貨物輸送重量 (千トン)	352	346	98.1
	貨物トンキロ※6 (百万トンキロ)	348	343	98.6
	郵便輸送重量 (千トン)	25	23	92.6
	郵便トンキロ (百万トンキロ)	25	24	94.2
※4 ※8 ※10 ※11	貨物重量利用率※7 (%)	25.9	26.2	+0.3
国際線	旅客数 (万人)	341	390	114.5
	座席キロ※1 (億席キロ)	201	216	107.7
	旅客キロ※2 (億人キロ)	150	168	112.4
	利用率※3 (%)	74.6	77.8	+3.3
	有効貨物トンキロ※5 (百万トンキロ)	2,009	2,262	112.6
	貨物輸送重量 (千トン)	303	425	140.1
	貨物トンキロ※6 (百万トンキロ)	1,267	1,560	123.1
	郵便輸送重量 (千トン)	15	17	109.0
	郵便トンキロ (百万トンキロ)	81	80	99.2
※9 ※11	貨物重量利用率※7 (%)	67.1	72.5	+5.4

※1:座席キロ＝座席数×運航距離(キロメートル) ※2:旅客キロ＝旅客数×運航距離(キロメートル)
※3:利用率＝旅客キロ÷座席キロ ※4:国内線旅客数には、IBEXエアラインズ、北海道国際航空、スカイネットアジア航空、スターフライヤー、オリエンタルエアブリッジとのコードシェア便の実績(当社販売分)を含む。
※5:有効貨物トンキロ＝有効(搭載可能)貨物重量(トン)×運航距離(キロメートル)。なお、旅客便については、床下貨物室(ベリ-)の有効貨物重量に各区分距離を乗じた数値。床下貨物室の有効貨物重量には貨物、郵便のほか、搭乗旅客から預かる手荷物搭載の有効搭載重量を含む。 ※6:貨物トンキロ＝貨物輸送重量×運航距離(キロメートル) ※7:貨物重量利用率＝(貨物トンキロ÷郵便トンキロ)÷有効貨物トンキロ
※8:国内線貨物および国内線郵便の実績には、北海道国際航空、スカイネットアジア航空、オリエンタルエアブリッジとのコードシェア便の実績(当社販売分)を含む。 ※9:国際線貨物および国際線郵便の実績には、コードシェア便の実績(当社販売分)、ブロック・スペース契約締結便実績および地上輸送の実績を含む。 ※10:国内線深夜貨物定期便の実績を含む。 ※11:国内線、国際線ともに不定期チャーター便の実績を除く。